

1. 研修の概要

近年、世界の教育現場では国際化が進み、文化や母語の異なる生徒が同じ教室にいることが日常となりつつあります。そのような教育現場で活躍することが求められる未来の教師たちが、教育現場に立つ前に、自らが異なる文化・生活環境で暮らす体験をすることは、異文化を理解する能力を向上させるとともに、その後の教員としての教育実践に大きな影響を与えられと考えられます。

そのため本学では、春休み期間中の2月中旬から3月下旬にかけて、教職を目指す学生10名を、本学の協定大学であるカナダ・カルガリー大学教育学部へ約1か月派遣し、現地での学校視察や現職教員との交流活動、大学における講義、カルガリー大学の学生との交流、およびホームステイを通じて、カナダの教育、文化、社会を深く理解することを目的とする「海外教育体験」という集中授業を提供しています。

この報告書では、2023年2月21日～3月22日にかけて行われた研修について、参加者からの声を集めてご紹介します。

2. 参加者による研修報告

<英語研修>

- ・ English for Education というクラスが週に3～4回あり1回3時間の授業でした。この授業では文法や発音、英単語などの英語スキルの向上を図るとともに、カナダの学校について学んだり、学校訪問をして学んだことを基にディスカッションを行ったりしました。日本の授業と比べてペア活動やグループワークが多く、自分の意見を伝えることが重視されました。初めは日本と異なる授業スタイルに戸惑うこともありましたが、自分の考えを英語で他者に伝えることができたときは達成感を感じました。



<学校訪問>

- ・ カルガリー市内にある 5 つの学校を訪問しました。特に印象に残ったことは、授業の雰囲気です。ある小学校を見学した際、ある授業では多くの子どもたちがソファに座ったり、寝転がったりしながら本を読んでいた。このような光景は日本の小学校ではまず目にしません。ある高校では、様々な授業が提供されており、日本と同じような理科の授業もあれば、ダンス、ファッション、美術、料理、ヘアデザインなどの専門性の高い授業もありました。その学校のカフェテリアには料理コースの生徒たちが実際に働いており、実践的なスキルを磨くことができるようになっていと感じました。また、ギフテッド（知能指数 130 以上で、特定の分野で能力が突出している子ども）のための学校も訪問しました。その学校には5つのコースとそれに加えて、演劇、コンピュータ、アウトドア、アートなど多数のオプションがあり様々な分野を学ぶことができるようになっていました。今回の学校訪問全体を通して、カルガリーの学校と日本の学校との間には、数多くの違いがあることがわかりました。



- ・ 学校訪問では、カナダの学校は子どもたち一人一人に焦点を当てていると感じました。例えばある学校では1クラスあたりの子どもの人数が少なく、更にいくつかのグループに分けて学習をしていました。そうすることで先生の目が細かなところまで届くので、きめ細かい指導を行うことができていると感じました。

<校外研修>

- ・ 将来教師になったときに、子どもたちに伝えたいと思うような研修場所へ行くことができました。ロッキー山脈やカルガリータワー、Royal Tyrrell 博物館、ロッククライミング、国民的競技であるアイスホッケーのリンクがある場所でのスケートなど、自分が楽しめるのはもちろんのこと、子どもたちに伝えたいと思えるような場所です。日本にはない広大な土地や山脈、歴史、文化等を写真に撮り、目に焼き付けて考えたことは、留学体験者しか得ることのできない大きな価値だと考えます。



<カナダの教育事情講義>

- ・ カナダの教育事情や様々な考え方についての講義がありました。印象に残っている講義は絵本についての講義です。日本では基本的に絵本は学校の授業で使うものではなく、休み時間や家に帰ってから楽しむために読むものという印象が強いと思います。しかしカナダでは、絵本を実際の授業で使っており、絵本はただ楽しむためだけでなく実際の教育分野にも活用できることを理解できました。他にも indigenous 教育という、もともとカナダにいた先住民族の教育についての講義や、人はみな違う経験をしているからこそ視点が違う、というお話をしていただき興味を持って講義を聞くことができました。



- ・ 日本で教員の経験のある日本人の先生の講義では、日本での教員の経験談をお聞きするとともに、カナダの教育と日本の教育の違いについてディスカッションを行い、日本の教育の特徴や自身の理想の教員像について改めて考える良い機会となりました。

<日本語学科の学生との交流>

- ・ 日本語専攻の学生と一緒に授業を受けました。一緒に英語と日本語のバイリンガルの本を作ったり、教育問題について話し合ったり、就職の面接練習をしたりしました。
- ・ Japanese Campus Club という部活では、英語や日本語で現地の学生と交流し、Calligraphy Workshop Volunteering というボランティア活動では、書道を教えました。また、放課後にアルバータ州で行われた日本語スピーチコンテストに出場する学生の練習を毎日手伝いました。その学生がコンテストで賞を取ったことは思い出の一つになりましたし、とても仲の良い友達になりました。



- ・ 日本語を熱心に学んでいる学生たちを見て、私も英語の習得を頑張ろうと改めて思いました。また、日本について興味のある学生ばかりなので、私自身もっと日本について知っておけばよかったとも思いました。

<ホームステイ>

- ・ はじめは少しの会話ですらままならない状態で落ち込みましたが、ホストファミリーは、優しくフレンドリーな方々で、英語が分からず困っていると、

いつも助けてくれました。本当に感謝していますし、出会えて良かったと心から思います。

<研修に参加した感想>

- ・ 将来教師を目指し、教育に携わる仕事をしたい人にとって、とても価値のある研修です。この研修期間で辛いと思ったことは一度もありませんでしたが、考え、悩み、失敗もしながら多くのことを学びました。これらはすべて挑戦から始まることであり、失敗してもできないことがあっても、挑戦しなければ何も生まれません。日本から離れ、日本について、自分自身についても一度向き合ったとき、カナダの良さを学べると同時に、日本の良さについても学べます。私は、より自分の将来像が鮮明になったことに加えて、もちろん英語のスキルアップにも繋がりました。



- ・ 移民大国であるカナダで世界各国にルーツを持つ学生とのコミュニケーション、カナダのダウンタウンでの散策から多文化社会の日常を肌で感じることができました。カルガリー大学の学生や現地の人との交流からそれぞれが持つ文化背景に敬意を込めて接することが私たちに必要であると感じました。カナダでは宗教・人種・タトゥーの捉え方・ベジタリアン・ヴィーガン・LGBTなどが日常生活にあり、日本では体験できない多様な文化に触れました。また今回の教育体験で関わったカルガリー大学の学生のほとんどが英語と母国語、または英語とフランス語のバイリンガルで、それに加えて日本語やドイツ語を勉強しており、言語を学ぶことはとても重要であると認識していました。それに比べると日本ではそのような意識を持つ学生はまだまだ少ない

ように感じました。



- ・ 3年生の春休みで、教員採用試験準備に忙しい時期でしたが、最後のチャンスだと思い参加を決めました。主免実習を終えてからの参加だったので、学校視察では教育実習での反省・成果を活かし、多角的な視点で観察することができました。また、海外の教育について学ぶことで、日本の教育の良さに気づいたり、カナダの教育の良さを生かした指導のあり方を考えることに繋がりました。また講義を通して自分の理想の教員像を改めて考えるきっかけにもなりました。参加して本当に良かったです。

3. おわりに

以上のように、研修期間中は楽しいことも大変なことも様々ですが、参加者たちは精神的に一回りも二回りも成長して日本に帰国します。約1か月という限られた期間ですが、密度の濃い経験を積むことができる機会です。参加者の選抜に当たっては英語力は問いませんので、専門教科や分野、取得予定の教員免許の種類を問わず、教職を目指す学生はぜひチャレンジしてください。

